



第405号

2020年10月

〒461-0004 名古屋市東区葵2丁目6-35 カトリック名古屋教区広報委員会 「教区ニュース」編集部 電話 (052) 935-2223 FAX (052) 935-2254 印刷所 株式会社 荒川印刷 毎月第1日曜日発行



ラウダート・シ特別年

2020年5月24日～2021年5月24日

教区ホームページ

福音のひびき

10月の説教者

- 4日 年間第27主日 大海 明敏 (五反城教会)
- 11日 年間第28主日 森 智宏 (神言修道会)
- 18日 年間第29主日 平田 政信 (小牧・守山教会)
- 25日 年間第30主日 パサ・イグナシウス・クリスティアス (平針教会)

昨年の教皇フランシスコ訪日に応えて、日本の教会では毎年9月1日から10月4日までを「すべてのいのちを守るための月間」と定めた。この取り組みについて、松浦司教から教区民への手紙と、それに付随して回勅『ラウダート・シ』の抜粋メモとが配布された。

「すべてのいのちを守るための月間」について

教区の皆さま

十主の平和

9月6日(日)は「被造物を大切にす世界祈願日」になっています。日本の教会は、昨年の教皇フランシスコ訪日のメッセージに呼応して、毎年9月1日から10月4日(アシジの聖フランシスコの記念日)を「すべてのいのちを守る月間」と定めました。名古屋教区ではすでに平和句間で同じテーマを掲げ、各地で取り組んできました。

教皇は今年、このテーマと深くかかわる回勅『ラウダート・シ』の発表5周年を記念して、2020年5月24日から2021年5月24日までを「特別ラウダート・シ記念年」と定めまし。同回勅は創世記を引用し、密接に絡み合う根本的な三つのかわり、すなわち「神とのかわり、隣人とのかわり、大地とのかわり」によ

り、人間の生が成り立っている(66)とし、「いのちにかかわるこれらの三つのかわり、外面的にもわたしたちの内側でも、引き裂かれてしまっていました。この断裂が罪」を指しています。私達は、単に環境問題という枠の中だけでなく、この三つのかわりに目を向けながら、祈り、取り組むことができればと思います。今、コロナ禍のただ中にあり、共同で行動することが難しい状況の中で、下記のことを参考に、一人一人が生活を直視し、出来ることを実行していくようにしましょう。

2020年9月1日
教区司教 松浦悟郎

ともに暮らす家

単なる「情報の蓄積や好奇心の満足ではなく、むしろ、痛みをもって気づくこと、世界に起きていることをあえて自分自身の個人的な苦しみとすること、そして、一人ひとりがそれについてなまじうることを見付け出すことです」(19)

具体的には、汚染と気候変動、水、生命多様性の喪失、生活の質の低下と社会の崩壊、地球規模の不平等、などが取り上げられる。

「こうした問題は使い捨て文化と密接につながっており、……排除された人々が悪影響を被るのです」(22) ↓ 取り組みがあっても、「利害や消費主義」や「自己満足と呑気な無責任さを助長する、見せかけの、表面的なエコロジー」が広がりつつある(59) のは、「現在のライフスタイルと、生産および消費のモデルとを保持するためのものです」

教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ』

松浦司教による抜粋メモ

これは、まとめでもなく、私が読んで、目に留まった文を抜粋したものほんの一部です。このような内容が書かれていることを知っていただき、実際に手に取って読むきっかけになれば幸いです。

創造の福音

創世記では、密接に絡み合う根本的な三つのかわり、「神とのかわり、隣人とのかわり、大地とのかわり」によって、人間の生が成り立っていることを示唆(66)、「いのちにかかわるこれらの三つのかわり、外面的にもわたしたちの内側でも、引き裂かれてしまいました。この断裂が罪」↓ この罪によって自然への「統治の任にゆがみが生じた」。それは同時に「人間を恣意的な支配に服する単なる客体とみなす」ことになる。(82)

「宇宙は、究極的に神の充満に達するように定められており」(83)、「すべての被造物はわたしたちと

ともに前進し、また、わたしたちを通して、共通の到達点である神へと向かっている」

「すべての生き物を同じレベルに置くことではなく、また人間からその独自の価値とそれに伴う重大な責任を奪うことでもありません」(90)。

「仲間である人間に対する優しさや共感や配慮が心に欠けているならば、人間以外の自然との親しい交わりは本物ではありません」(91) 「地上の被造物仲間に対する無関心や残虐行為は、他の人間への接し方に影響を及ぼすことになるのです」(92)

その他

技術躍進 ↓ 「それらを利用する経済力のある人々に、人類全体と全世界に及ぶ強大な支配権を与えてきた」(102)

「人間の有する根本的なかわりのすべてをいやすことなく、自然や環境とのかわりをいやすふりはできません」(119)

「人間が自分自身を中心に据えるとき、人間は利己的な利便性を何よりも優先し、他のすべてのものは相対的なものになります」(122) ↓ 実践的相対主義 ↓ 「使い捨て」の論理を生む。

環境とは、「自然と、その中で営まれている社会とのかわりのこと」(139) ↓ 「わたしたちは、環境危機と社会危機という別個の二つの危機にはなく、むしろ、社会的でも環境的でもある一つの複雑な危機に直面している」。一つ一つの有機体は、神の被造物として、それ自体善なるものでありながら、調和のとれた存在。

「エコロジーとは生命体とその生育環境とのかわりの研究のこと」(138)、すべてがつながっている ↓ 貧しい人々のための優先的選択を認めるように(158)

「地球は故郷であり、人類はともに暮らす家に住む一つの民」 ↓ 世界規模の合意が不可欠(164)

政治は経済に服従してはならず、経済は効率主導主義パラダイムに身をゆだねてはなりません。(189)

主日の意味 ↓ 「わたしたちが神との、自分自身との、他者との、世界とのかわりを修復するための日です。主日は、復活の日、新しい創造の『第一の日』、この日はまた、『神のもとにおける人間の永遠の休息』を告げる日でもあります」(237)

「すべてのいのちを守るための、キリスト者の祈り」

宇宙万物の造り主である神よ、あなたはお造りになったすべてのものをご自分の優しさで包んでくださいます。

わたしたちが傷つけてしまった地球とこの世界で見捨てられ、忘れ去られた人々の叫びに、

気づくことができよう、一人ひとりの心を照らしてください。

無関心を遠ざけ、貧しい人や弱い人を支え、ともに暮らす家である地球を大切にできるよう、

わたしたちの役割を示してください。

すべてのいのちを守るため、よりよい未来をひらくために、聖霊の力と光でわたしたちをとらえ、あなたの愛の道具として遣わしてください。

すべての被造物とともにあなたを賛美することができましよう。

わたしたちの主イエス・キリストによって、アーメン。

(日本カトリック司教協議会認可)

2020年度 名古屋教区の 各種平和旬間行事



今年の名古屋教区における平和旬間(8月6日~15日)は、昨年の教皇訪日のテーマ「すべてのいのちを守るため」をそのまま平和旬間のテーマとして準備を進めてきた。新型コロナウイルス感染対策のため、布池司教座聖堂に教区全体が集まるのを避け、各ブロックでテーマに沿って平和祈願ミサ、行事を行う予定であった。しかし、いったん取まったかにみえたコロナ感染が8月に入り再び広がり始め、愛知・岐阜県の知事が緊急事態宣言を発令したため、それに従って急遽、ミサも再び非公開となり、用意してきたブロックごとの企画も中止せざるを得なくなった。しかし北陸ブロックはこの範囲外であったので、北陸ブロック共通の意向のもとに「ミサで平和祈願ミサを捧げた。北陸ブロック内の各小教区は、この日の説教で松浦司教の北陸信徒に向けたメッセージを紹介し、平和に関する共同祈願が唱えられた。また各教会で書いてもらった平和メッセージをブロックでまとめ、祈りの書にしてYouTubeに流している。

その他、平和旬間中の行事として、主税町記念聖堂では「主に捧げる10日間」実行委員会による聖体賛美式、24時間聖体礼拝が行われた。多くの小教区でも聖体礼拝が行われ、酷暑とコロナ禍の過酷な状況の中、熱中症や感染対策を取りながら、聖体のもとで平和を祈り願った。正義と平和委員会では弁護士、ベ・ミョンオクさんによる講演会「愛は憎悪に打ち勝つ——日韓の対立から理解へ——」が行われた。

「コロナの時代と福音」

松浦悟郎司教、YouTubeで語る

松浦悟郎司教は8月、「コロナの時代と福音」と題してYouTubeで語った。主催は日本カトリック正義と平和協議会。主な内容は次の通り。



コロナは我々の生活の在り方、人間関係、政治、経済と、あらゆるものを壊していった。その中で、いくつか違和感を持った。

ひとつはコロナに関する報道。コロナにまつわる様々なことが朝から晩まで取り上げられた。それ自体は大事なことで良

名古屋教区・松浦悟郎司教は 「コロナ対策(11)と(12)の指針を示す」

今年6月から7月まで新型コロナウイルス感染症患者数は、一旦は抑えられたかに見えたが感染の拡大の勢いは止まらず、8月に入り再び感染者数が急増し「第2波」への懸念が強まった。急遽愛知県と岐阜県に「緊急事態宣言」が再発令された。この様な事態を受け、名古屋教区長・松浦悟郎司教はコロナ対策(11)を8月6日に、同対策(12)を8月20日に発表し、名古屋教区として指針を示した。

新型コロナウイルス対策(11)
(1)愛知県と岐阜県にある小教区では、8月9日(日)、15日(土)被昇天、16日(日)、23日(日)、30日(日)の公開ミサを中止します。ただし、以前と同じように、「主日のみ言葉の黙想と聖体拝領」など、信徒が秘跡に触れられるための工夫をして下さい。

・突然のことなので、知らずに来られた方のために司祭はミサの時間には聖堂に待機し、聖体拝領などの配慮をお願いいたします。

・平日のミサは、各小教区で状況が異なるので一律に中止はしませんが、最終的には、主任司祭(司牧チーム)と小教区の判断にお任せします。

・平和旬間で企画されている聖体礼拝は、比較的3密を避けられることと沈黙での祈りが中心なので実行可能で

新型コロナウイルス対策(12)
(1)主日の公開ミサ中止は8月末までですが、小教区の判断によっては8月30日(日)からミサを再開することがあります。

・なお、これまで通り、感染予防対策(マスク着用、手指消毒、3密を避けるなど)を継続するようお願いいたします。たとえ感染しても、非難ではなく、皆に支えられたいと思える社会になればと心から願っています。特に感染された方、医療従事者の

一粒会 2020年度活動について

名古屋教区の皆様へいつも一粒会の活動に多大なるご協力を深く感謝します。

2020年度の一粒子活動は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、5月の委員総会から、東海地区、北陸地区での一粒会の集いにいたる8月までのすべての行事が開催できませんでした。

今年度はまた、特別活動として、毎年11月23日に東京カトリック神学院で行われる「ザビエル祭」に名古屋教区の青少年を招待する企画もありました。しかし、これもやむなく来年に延期となりました。

しかし、一粒会の活動で最も肝心なのは、献金とお祈りです。一粒会の

なあと考えた。この世界には何百万、何千万という貧しい人々、難民の人たちがいて、彼らは本当に衛生状態の悪い中で病気になる。医療保険のない国では、貧しい人たちは病気になることも病院に行くことすら出来ない。その人たちのことを私たちは忘れてはいけません。私たちが変えていける世界は、私たちが結ぶべき世界です。

コロナでいろいろなことに気づかされていく。コロナが終息した後の世界を考えながら、今、私たちの生き方、社会の在り方にしっかりと目を向けていく必要があると思う。また皆さんと一緒に、そのようなことを分かち合えたらと思う。

一粒会 2019年度 会計報告

2019年4月1日~2020年3月31日

科目	金額	備考
《収入の部》		
維持献金(会費)	11,749,001	48教会
ミサ献金	53,260	東海地区 39,000円、北陸地区 14,260円
特別献金	1,030,209	匿名献金1,000,000円 他
雑収入	90	
当期収入合計	12,832,560	(A)
前期繰越金	15,982,665	
収入合計	28,815,225	(B)
《支出の部》		
神学生育成援助金	12,800,000	
[内訳]		
教区	8,000,000	東京カトリック神学院分担金他
活動費	445,253	一粒会の集い2回(東海・北陸)、委員総会、運営委員会、その他活動
[内訳]		
謝礼金	80,000	「集い」会場、講師、手話通訳
会議費	21,240	委員総会、運営委員会
交通費	196,782	会議、「集い」交通費
印刷費	106,580	「集い」関連資料、会議資料 他
諸活動費	0	神学院通信(日本カトリック神学院)
慶弔費	0	司祭叙階祝
通信費	38,408	切手、はがき等 郵送料 他
消耗品・雑費	2,243	コピー用紙 他
当期支出合計	13,245,253	(C)
当期収支差額	-412,693	(A)-(C)
次期繰越金	15,569,972	(B)-(C)

新刊書紹介

教皇フランシスコ 十戒・主の祈り — 教皇講話集 ペトロ文庫

編訳者 カトリック中央協議会事務局
A6判224ページ 定価 本体800円+税10%

2018年から2019年にかけて行われた、「十戒」「主の祈り」をテーマとした連続講話を収録。十戒は神との対話であり、隷属からの解放である自由への道だと説き、キリスト者の祈りは「アッパ」の一言を心に抱くだけで深められるのだと教える。愛である神と人間の関係について語る。フランシスコ教皇の真骨頂ともいえる優しさに満ちたカテケージス。

ご注文はカトリック中央協議会・出版部へ。
電話 03-5632-4429 FAX 03-5632-4456

ク着用、手指消毒、3密を避けるなど)を継続するようお願いいたします。たとえ感染しても、非難ではなく、皆に支えられたいと思える社会になればと心から願っています。特に感染された方、医療従事者の

方々のために、引き続きお祈りをお願いいたします。皆さまには「カトリック名古屋教区」のホームページからも教区の情報を得ることができるとともに、活用していただければと思います。

愛知・岐阜でミサ中止

緊急事態宣言を受けて6月から7月にかけて新型コロナウイルスの感染は抑えられたかに見えたが、8月に入り再び感染者数が急増したため、愛知県と岐阜県は「緊急事態宣言」を再び発出した。この事態を受け、松浦司教は「コロナ対策(11)」を8月6日に、同「対策(12)」を8月20日に発表し、教区としての対策指針を示した。

その結果、愛知・岐阜の小教区では、8月9日、16日、23日、30日の主日と15日聖母被昇天の祭日のミサが公開中止となった。その一方で信者にはミサの時間帯に、3密を避けて個人的に聖堂を訪れ、静かに主日のみこころばを黙想し、聖体拝領することが勧められた。

すべてをのちを守るため、

2020年8月9日平和祈願ミサ 司教メッセージ

「すべてのいのちを守るため」

名古屋教区司教 ミカエル 松浦悟郎

(ベトナム語)

Ngày 9 tháng 8 năm 2020

Giáo phận Công giáo Nagoya

- Tuần lễ Hoà bình

HƯỚNG TỚI BẢO VỆ TOÀN THỂ SỰ SỐNG

Giám mục giáo phận Matsuura Goro

Trong những ngày này, Giáo phận chúng ta cầu nguyện cho Hoà bình, nơi mỗi giáo xứ cũng như mỗi hạt mục vụ. 39 năm về trước, Giáo hội tại Nhật đã khởi sự một Tuần lễ cầu cho Hoà bình hàng năm, nhằm đáp ứng Sứ điệp hoà bình của Thánh Giáo hoàng Gioan Phaolô đệ nhị. Năm nay, chúng ta lại cử hành tuần lễ này với chủ đề 'Để bảo vệ toàn thể sự sống' theo ý Đức Giáo hoàng Phanxicô trong chuyến thăm Nhật của ngài cuối năm ngoái.

Từ nhiều tháng nay, cả thế giới và nước Nhật đã chịu nhiều biến động do cơn đại dịch Covid-19. Cơn dịch đã ảnh hưởng không chỉ đời sống thường nhật của chúng ta, mà tác động mọi mặt chính trị, kinh tế, tập quán, các quan hệ nhân sinh và giá trị xã hội. Ngoài những điều cảm nhận được, có thể còn có những điều khác mất đi mà chúng ta chưa nhìn ra được.

Năm nay cũng là năm kỷ niệm thứ 75 cuộc Thế chiến thứ II kết thúc. Người dân thời ấy bị dẫn vào chiến tranh bởi những người cầm quyền, trong khi những quyền tự do của họ bị tước dần đi - và khi hiểu ra thì sự dã rồi, đã quá muộn để đề kháng. Chúng ta, những người đang sống hôm nay, nên nhớ lại lịch sử để tránh lặp lại vết xe cũ.

Một cuộc chiến tranh hủy diệt toàn bộ đời sống không tự nhiên xảy ra đột xuất. Nhưng trước đó, các mối quan hệ đời sống bắt đầu đổ vỡ, quyền tự do bị hạn chế dần, ứng xử kỳ thị diễn ra, những nước gọi là "quốc gia thù địch" bị lên án, việc gia tăng vũ trang được biện minh. Cả một tiến trình được thực hiện để rồi trở nên không thể ngăn cản khiến người dân thấy không thể cưỡng lại được. Người dân bình thường, trong âu lo bị những ngôn từ gieo rắc chia rẽ và thù nghịch xỏ mũi. Như thế, một khi bộ máy chiến tranh bắt đầu chạy, khó lòng có gì ngăn nó lại - và chiến tranh sẽ hủy diệt không chỉ mạng sống con người mà cả các sinh linh khác và môi trường chung. Chiến tranh tạo nên một văn hoá của bạo lực, và nó tàn phá cả xã hội lẫn nhân tính của mỗi con người.

Để không sa vào tình trạng này, trước tiên chúng ta phải lắng nghe tiếng nói của Thiên Chúa. Trong Bài đọc thứ nhất ngày hôm nay (Sách Các Vua 19:91, 11-13a), ngôn sứ Elia phải chạy trốn bà Hoàng Isabel tìm giết ông. Ông trốn trong một cái hang, nhưng rồi tới lúc bước ra ngoài để tìm nghe tiếng của Chúa. Ông không nghe thấy tiếng Chúa giữa giông bão, động đất hay hoả tai. Nhưng sau đó, ông nghe ra tiếng Người trong cơn gió thoảng nhẹ. Ngày hôm nay, chúng ta có thể lo lắng vì dịch nhiễm hay vì quan hệ căng thẳng với các nước láng giềng - nhưng nếu ta để cho những điều ấy gây ồn ào huyên náo trong tâm trí, ta sẽ không nghe được tiếng Chúa đâu. Ta phải làm gì để nghe ra tiếng Chúa muốn nói?

Cụ thể mà nói, để nghe ra tiếng Chúa, chúng ta cần lắng nghe những ai là yếu nhất, đang đau khổ nhiều nhất trong hoàn cảnh hiện nay, đồng thời luôn nắm lấy những lời của Chúa Kitô trong cầu nguyện. Vì Chúa đã xem lời than khóc của họ như của chính Người, và kêu lên "Ta khát!" trên thập giá.

Khi nói 'những người yếu', chúng tôi không chỉ nghĩ đến những người đang sống đây, mà cả những người đã chết mà không có tiếng nói, những nạn nhân của những cuộc chiến quá khứ chết đi trong tư thế nhân phẩm bị chà đạp. Trong ý nghĩa này, 75 năm sau chiến tranh là một cơ hội tốt để chúng ta nhìn lại lịch sử của mình một cách chân thực.

Nếu chúng ta dám bước ra khỏi bóng tối trong cái hang của chính mình, và đứng trước Thiên Chúa với lòng khiêm nhu như thế, chắc chắn ta sẽ nghe được tiếng Chúa thầm nói với ta.

Con đường đến hoà bình hẳn là không dễ dàng. Bởi vì thực tại có thể bị làm lu mờ bởi những dục vọng thế gian, khiến cho tiếng nói lạnh lẽo của những ai muốn bảo vệ hoà bình bị khoả lấp. Nếu gặp tình thế đó, hãy nhớ chính Chúa Giêsu đến giữa các môn đệ và nói, "Bình an cho anh em. Thầy đây. Đừng sợ." (Mt 14:27)

Với niềm tin ấy đỡ nâng, chúng ta cùng cầu nguyện và hành động!

司教の「平和」メッセージ
8月9日開催予定だった教区平和祈願ミサ(愛知県の緊急事態宣言を受けて中止)のため、準備された松浦司教の説教が教区ホームページで公開された。この説教は日本語のほかにも、ベトナム語、ポルトガル語と英語に翻訳されている。



松浦悟郎司教

名古屋教区司教
ミカエル 松浦悟郎

2020年8月9日
カトリック名古屋教区
平和祈願ミサ・
司教平和メッセージ
「すべてのいのちを守るため」

いま、わたしたち名古屋教区では、各ブロック、小教区で心を合わせて平和を祈っています。39年前、日本の教会が、教皇

ヨハネパウロ二世の「平和メッセージ」にこたえて始めた平和週間を、今年も「すべてのいのちを守るため」という教皇フランシスコ訪日テーマで迎えています。
今年にはコロナ禍によって、この数ヶ月で世界も日本も劇的に変わりました。生活のあり方だけでなく、政治、経済から生活習慣、人との関わり方、価値観まで大きな影響を受けています。その中で新しい気づきもあり、逆に見えなくなりました。39年、日本の教会が、教皇

ヨハネパウロ二世の「平和メッセージ」にこたえて始めた平和週間を、今年も「すべてのいのちを守るため」という教皇フランシスコ訪日テーマで迎えています。
今年にはコロナ禍によって、この数ヶ月で世界も日本も劇的に変わりました。生活のあり方だけでなく、政治、経済から生活習慣、人との関わり方、価値観まで大きな影響を受けています。その中で新しい気づきもあり、逆に見えなくなりました。39年、日本の教会が、教皇

さて、今年には戦後75年の年にあたります。当時の人々は、自由が少しずつ奪われていく中で戦争へと向かわされ、気がついた時には、もはや抵抗できない強い力で、国民あがての戦争へと駆り立てられていったのです。今を生きるわたしたちは、過ちを繰り返さないために、このことを決して忘れてはならないのです。

あらゆるいのちを壊す戦争は、突然やってくるものではないです。生きた関係が壊れ始め、自由が少しずつ制限され、差別が行われ、いわゆる「敵国」がすりこま

文化を生み出し、それが社会のあり方や、一人ひとりの人間性にまで深く影響を及ぼしていくのです。
このような状態にならないように、わたしたちはまず、神の声を傾けなくてはなりません。今日の第1朗読(列王19:9a-11, 13a)で、エ

神の声を聞くというのには、具体的には、祈りの中でキリストの思いに触れながら、いまの現実の中で、特に弱い立場に置かれ、苦しんでいる人たちの声に耳を傾けることです。キリストは、彼ら

とされ、十字架の上で「渇くような神の声」を聞くことができよう。平和をつくる道は決して簡単ではありません。欲望渦巻く現実の中で起る騒がしい声、時に平和を守ろうとする人を排斥していくからです。そんな逆風が吹いたとき、その中をわたしたちのところに來てくださるイエスがいて、「安心しなさい。わたしたちが恐れることはない」(マタイ14:27)と励ましてくださっているのです。
こうした信仰に支えられて、ともに平和を願い、祈り、行動してまいりましょう。

2020年8月9日平和祈願ミサ 司教メッセージ

「すべてのいのちを守るため」

名古屋教区司教 ミカエル 松浦悟郎

(ポルトガル語)

09.Agost.2020

Semana da Paz

Diocese de Nagoya

Para defender todas as vidas

O Bispo diocesano: Michael Matsuura Gorou

Agora, na Diocese de Nagoya, estamos orando pela paz juntos em cada bloco e paróquia. Trinta e nove anos atrás, a Igreja no Japão saudou a semana da paz, que foi iniciada em resposta à “mensagem de paz” do Papa João Paulo II, e este ano com o tema da visita do Papa Francisco ao Japão, “Para defender todas as vidas”.

Este ano, o mundo e o Japão mudaram drasticamente nos meses devido ao desastre da corona-vírus. É muito influenciado não só pela forma como vivemos, mas também pela política e economia, estilo de vida, relacionamentos com pessoas e valores. Há novas realizações nisso que percebemos, mas pelo contrário, há muitas coisas que foram perdidas e coisas que desapareceram.

A propósito, este ano marca 75 anos desde o fim da última Guerra Mundial. As pessoas naquela época eram direcionadas para a guerra enquanto a liberdade era privada pouco a pouco, e foi levada para a guerra do povo com um poder forte que não era mais capaz de resistir ao perceber. Nós que vivemos no presente nunca devemos esquecer disso para que não repitamos nossos erros.

Uma guerra que destrói toda a vida não vem de repente. As relações de vida começam a quebrar, a liberdade é gradualmente restrita, a discriminação é realizada, as chamadas “nações inimigas” são absorvidas, elas não estão mais enfrentando o passado, a lei muda e os armamentos são fortalecidos. É aquele que se aproxima gradualmente assim, e é pego pelo poder que não pode ser parado enquanto ignora cada um como “não tem jeito”. As pessoas são movidas por palavras excitantes que sempre impulsionam as ansiedade e hostilidade. Desta forma, numa vez que uma guerra começa, é difícil parar, e não só os humanos, mas também todos os seres vivos e ambientes serão destruídos. A guerra cria uma cultura de violência, que influencia profundamente o estado da sociedade e a humanidade de cada pessoa. Para não cairmos neste estado, devemos primeiro ouvir a voz de Deus. Na primeira leitura de hoje (Reis 19:9a, 11-13a), Elias escapa da Rainha Isabel, que tenta matá-lo e se esconde em uma caverna. Elias saiu para ouvir a voz de Deus, mas não havia Deus no vento feroz, terremoto e fogo. E então ele ouviu um sussurro silencioso. Agora, mesmo que você esteja preocupado com a infecção de corona-vírus ou a tensão com países vizinhos, se tal fenômeno se tornar uma voz ruidosa em seu coração e correr por aí, você não ouvirá a voz de Deus nele. Então, como podemos ouvir a voz de Deus?

Ouvir a voz de Deus é ouvirmos aqueles que são particularmente fracos na realidade e sofrimento presentes, enquanto toca os pensamentos de Cristo em oração. Cristo fez os gemidos deles em seus próprios gemidos, e disse na cruz “tenho sede”. Pessoas em posições fracas incluem não apenas aqueles que estão vivos agora, mas também aqueles cuja dignidade humana foi pisoteada mesmo em guerras passadas e morreram, e devemos de ouvir as vozes silenciosas deles. Nesse sentido, o 75º ano após a guerra é uma boa oportunidade para enfrentar a história com sinceridade. Se deixarmos a caverna das trevas com esses pensamentos e ficarmos diante de Deus, certamente seremos capazes de ouvir a voz sussurrando de Deus.

O caminho para fazer a paz não é fácil. Por causa da voz ruiva que acontece no desejo girando a realidade, às vezes esta voz exclui a pessoa que tenta defender a paz. Quando um vento contrário sopra como assim, Jesus vem até nós e nos anima dizendo: “Tende confiança, sou eu. Não tenhais medo” (Mateus 14:27).

Apoiados por essa fé, rezemos e ajamos juntos para a construção do reino de Deus em Paz.

2020年8月9日平和祈願ミサ 司教メッセージ

「すべてのいのちを守るため」

名古屋教区司教 ミカエル 松浦悟郎

(英語)

August 9, 2020

Dear the Catholic Diocese of Nagoya
Concerning The Week for Peace

PROTECT ALL LIFE

From Bishop Matsuura Goro

These days, each pastoral bloc and parish in the Nagoya diocese is praying for Peace. Thirty-nine years ago, the Church in Japan started an annual Week for Peace in response to Pope St. John Paul II's Peace Message. This year, we celebrate the Week with the theme 'PROTECT ALL LIFE' pronounced by Pope Francis in His visit to Japan last year.

In recent months, due to the Covid-19 pandemic, the world and Japan have seen many dramatic changes. Its effects are felt not only in our daily lives, but also in politics, economics, customs, people's relationships, and values as well. Amid all of those, there are some things we can recognize but there are also other things that can be lost that we cannot see.

This year marks the 75th anniversary of the end of World War II. At that time, people were being led to war by those in power while their freedoms were chipped away little by little — and when they noticed it was already too late to stand up. We, living in the present time, should remember that in order not to repeat the same mistake.

An all life-destroying war does not come suddenly. First, lived relations begin to break down, freedom is restricted step-by-step, discrimination is normalized, so-called “enemy states” are blamed, the past is ignored, laws change, and increased armaments are justified. Such a gradual maneuvering eventually becomes unstoppable by making people feel helpless to resist. Normal people in their anxieties are duped by divisive rhetoric that sows hostilities. In that way, once a war is started, it is very difficult to stop, and not only humans but other living beings as well as the environment are destroyed. War creates a culture of violence, which deeply damages the state of society and the humanity of each person.

To avoid such a situation, we must first listen to the voice of God. In today's First Reading (Kings 19:9a, 11-13a), the prophet Elijah was running away from Isabel, the queen who wanted to kill him — and he came to hide in a cave. After a while, he came out to hear the voice of God, but he didn't find God in the gusty wind, the shaking earthquake, or the fierce fire. Afterward, he heard the voice of God quietly whispering in a breeze. Now, even if we are worried about virus infection or about tension with neighboring countries, letting them stir up noise in our mind only prevents us from hearing God's voice. So, what can we do to hear the voice of God?

To hear the voice of God concretely means we listen to those who are particularly weak, who are suffering the most while touching the thoughts of Christ in prayers. Christ has taken their lamentations as His own, as He cried out, “I thirst” on the Cross. When we say weak people, we do not mean only those who are living now, but also victims of past wars who died with their human dignity trampled and who had no voice. In that sense, 75 years after the war is a good opportunity for us to look back at our history with honesty. Getting out of the darkness of our own cave and standing before God with such humility, surely we will be able to hear God's whispering voice.

The path to peace is definitely not easy. Because reality can be obscured by worldly desires that exclude the sane voice of those who want to protect peace. When we face such a headwind, remember that Jesus came among us and said, “Peace be with you. It's me. Don't be afraid” (Mt 14:27).

May all of us, supported by this faith, pray and act together.

「世界難民移住移動者の日」 委員会メッセージ

「イエス・キリストのよ
うに、逃れざるをえない
国内避難民を受け入れ、
守り、促し、彼らと共に生
する」

教皇フランシスコは、
今年のメッセージの中で
特に国内避難民について
触れています。難民とは
「国境の外に出てきた人」
と定義されていますが、
湾岸戦争の時、隣国トル
コの国境封鎖によってイ
ラク国内で避難民となっ
たクルド人を、当時難民
高等弁務官だった緒方貞
子さんは、これまでの枠
を超え、難民として支援
しました。国内避難民に
光が当てられた瞬間でし
た。

現代の日本にも多く
の「国内避難民」が存在
しています。すでに日本
で生活しながら、さまざま
な理由で家を失い避難
している人びとです。非
正規滞在となり、長期間
入管施設に収容されてい
る人、仮放免されても家
が無い人、野宿を強いら
れている人、「ネットカ
フェ難民」と呼ばれる人。
教皇は私たちの社会にあ
る現実を目を向け、固定
化した見方を超えてほし
い、と呼びかけているの
ではないでしょうか。

「飢えた人、渴いた人、
裸の人、病気の人、旅を
している人、牢にいます人
として問いかけられるキ
リストの顔を、彼らの顔
に見いださよう、わたし
たちは招かれています」
2020年9月27日
日本カトリック
難民移住移動者委員会
委員長 松浦悟郎
担当司教 山野内倫昭
(カトリック中央協議会より)

神言修道会司祭叙階式のお知らせ

このたび神言神学院から神言会会員の5人が、司祭叙階のお
恵みを受ける運びとなりました。限りなく神の恵みに感謝す
るとともに皆様の日ごろからのお祈りとご支援に感謝申し上
げます。なお今回叙階式及び初ミサは、新型コロナウイルス
の影響で一般参加をお断りするかたちになりますが、インター
ネットでのライブ配信を行います。

司祭叙階式
日時 10月10日(土) 午前10時より
場所 カトリック南山教会
名古屋市昭和区南山町1
司式 ミカエル松浦悟郎司教
受階者 マウリアヌス・ファレンティノ・ウィレム・ダクニヤ
森 智宏
篠崎エジソン
ジョナサン・レイ・ピリアコルタ
マリオ・フランシスコ・チェメ・オワ・ポア
(彼はインドネシアにて叙階予定)

初ミサ
日時 10月11日(日) 午前10時より
場所 神言神学院大聖堂
名古屋市昭和区八雲町70-9 ☎052-832-2082
ライブ配信 YouTube: 神言修道会叙階式'20
http://tiny.cc/3xvlsz

神言修道会日本管区長 ジェブーラ・エウゲニウス
神言神学院長 リチャード・ジップル



平和をつなぐを
講話する松浦司教

講話は、新型コロナ開
連の話から始められた。
私たちの関係を壊そうと
するコロナに対し、今後
どのように人と強く交わ
れるか真剣に考える必要
や、自由の制限や差別で
自分自身の苦しみにとし、一
人ひとりがそれについて
なし得ることを、今のこ
の状況下でこそ見つけ出
していきたい。最近コロ
ナで心まで寒さがちな私
に核心に迫る何かを頂い
た」の感想があった。



感謝を述べる
伊澤さん

要約筆記奉仕者の伊澤
さんから「平和を作る一
歩を歩むか歩まないかは
自分自身にあると切実に
感じた。回廊、ラウダー
ト・シグ」にあるように世
界に起きていることを自
分自身の苦しみにとし、一
人ひとりがそれについて
なし得ることを、今のこ
の状況下でこそ見つけ出
していきたい。最近コロ
ナで心まで寒さがちな私
に核心に迫る何かを頂い
た」の感想があった。



神父とシスターに聞いてみた！ ～召命～ シリーズ A Vocation Series interviewing Priests and Nuns about their vocation!

「なぜ、どんなきっかけで神父・シスターになったのか」をマリア中西里奈さんが
インタビューした。新企画のエピソード1では平田豊彦神父(布池教会)と幼き聖マリア
修道会のシスターフランチェスカ(修道院長)。エピソード2はシーランド神父(神言
修道会)と聖マリアの無原罪修道会のシスターヨハ
ンナ。エピソード3は名古屋教区長のミカエル松浦
悟郎司教。エピソード4では片岡義博神父(富山教
会)と幼き聖マリア修道会のシスター大久保がお話
ししています。視聴ご希望の方は名古屋教区HPの
Nagoya Diocese-YouTubeのアドレスをひらいて見
てください。



インタビューに答える平田豊彦神父(右)

2020年度 聖書の学び〈岐阜〉後期

- ① 日時 10月11日(日) 12:00(昼食)～16:00迄
序 メシア・イエスの来臨(マルコ1章)
「神の子イエス・キリストの福音の始まり」
第一部 イエスはどういう方か(マルコ1章)
 - ② 日程 11月15日(日) 12:00(昼食)～16:00迄
第一部 イエスはどういう方か(マルコ2章)
「このようなことは、今までみたことがない」と言った。
- 連絡 諸事情により一週間ずれる事があります。参加希望者は日時
をご確認下さい。
場所 聖マリアの無原罪教育宣教師修道会
岐阜修道院・聖マリア女学院
〒501-2565 岐阜市福富201 係り シスター錠(いかり)
☎058-229-3985(修道院) 090-3933-3220(錠・携帯)
- 交通アクセス JR岐阜駅から市バス12番バスのりばから乗車。三田
洞バス停下車(27～28分乗っています)乗車時に電話を下さい。バス
停で待っています。JR名古屋駅から約1時間です。自動車でも来れる
方は聖マリア女学院でナビ設定してください。

年から2012年まで戦
跡を訪問し、その地で強
制連行され犠牲となった
中国人・朝鮮人を偲び、
追悼を行った。何れの
戦跡も辺鄙な山間にあつ
た。彼らは理不尽にも強
制的に日本に連行され、
炭鉱、ダム建設等の工事
現場を転々とさせられ
た。極端な資材・物資・
食糧不足のなか、危険過
酷な重労働を銃剣の下奴
隷として酷使され、当然
病死や怪我、亡くなった
人は数知れない、しかし、
記録が処分され正確な数
は不明だと言う。ある地
下軍需工場跡地に立ち、
真つ暗な作業半ばのトン
ネルを辿った。行き止ま
りの前で、彼らの苦難を
自分に置き換え思いを馳
せようとした。無数の鶴
嘴跡の残る岩盤はまさに
1945年8月15日の時
が止まったまままだ。幾
多の強制連行者の叫び、
涙、汗と血の歴史を刻ん
だ永遠に消えない岩盤が
あった。

ペ弁護士は講演で次の
ように語られた。日本に
よる韓国侵略、植民地化
は強制連行者、徴用工、
日本軍「慰安婦」の非人
道的犯罪の歴史だった。
しかし、安倍政権は一貫
してそれを否定し、謝罪
賠償を拒否して来た。個
人賠償請求権は消滅して
ないとの政府見解にも関
わらず、被害者は裁判で
請求できないという奇妙
な見解、18年10月30日の
韓国大法院判決、(新日
鉄住金に対する元徴用工
4名の賠償支払いを命じ
た)を「国際法に照らし
てあり得ない判断」と反
論した。それが、今日の
日韓対立、韓国朝鮮人へ
の差別・ヘイトスピーチ
を1層煽っている。安倍
政権の見解、施策には植
民地支配を認めないなど
歴史修正主義があり、そ
して、何よりも、人権を
奪われた被害者への無関
心、無理解がある。今、

これまでも、さまざま
修道会と連携しながら社
会問題に取り組んできた
経験から、立場や背景が
違う人たちとともに働く
ことが、福音を広めてゆ
くために非常に重要であ
ると考えています。司牧
や、最近の日本の状況に
ついて疎い私ですが、新
潟教区の皆さんに「一か
ら教えて頂くつもりで、と
もにゆっくりと福音の道
を歩んでいきたいと思っ
ています。どうぞお祈り
ください。

この度、新潟教区司教
の任命を受けました、神
言会の成井大介と申しま
す。愛知県岩倉市生まれ
で、これまで8年ほど神
言会本部(パチカン)の
社会問題に関する宣教師
活動の調整役をしていま
した。教会での司牧経験は
司祭叙階直後に秋田教会
で3年間助任司祭として
働いただけですので、こ
んな自分に司教が務まる
のだろうか、と心配して
おります。

「パウロ成井大介」
「被選司教に聴く」
立場や背景の違う
人たちが共に働く

韓国との対話、友好を進
めて行く上で、歴史の正
しい認識、被害者への共
感を育てる教育が必要と
なっている。
今回、ペ弁護士から、
「すべての命を守りま
しょう」と。

よりよい未来をひらくため

〔祭〕祭日(祝) 祝日(記) 記念日
10月の教会暦
 1日(木) 聖テレジア(幼いイエスの)
 おとめ教会博士(記)
 2日(金) 守護の天使(記)
 4日(日) 年間第27主日
 7日(水) ロザリオの聖母(記)
 11日(日) 年間第28主日
 15日(木) 聖テレジア(イエスの)お
 とめ教会博士(記)
 17日(土) 聖イグナチオ(アンチオケ)
 司教殉教者(記)
 18日(日) 年間第29主日
 25日(日) 世界宣教の日(献金)
 年間第30主日
 28日(水) 聖シモン 聖ユダ使徒(祝)

14日(水) カリタス福祉委員会
 15日(木) 月集*
 17日(土) 正義と平和学習会/レジオ
 名古屋クリア
 18日(日) 愛岐B会議/城南B「セ
 ニヨール・デ・ロス・ミラ
 グロス」/青年委員会
 22日(木) 司教評議会*
 24日(土) 濃尾B会議/カトリック看
 護協会例会
 25日(日) 金沢教会堅信式*
 31日(土) 典礼委員会

20日(火) 南山学園評議員会
 P配信あり。
告知板
 新型コロナウイルス感染症拡大防止の
 ため中止又は延期となった行事
 ① 8月3日〜6日青年委員会「広
 島巡礼」
 ② 8月9日平和旬間ミサ(布池教
 区)
 ③ 8月30日一粒会の集い(北陸地
 区)
 ④ 9月26日難民委「共に生きるた
 めの研修会」
 ⑤ 9月27日教区障害者のつどい
 ⑥ 毎年10月開催のアパレシーダと
 子供たち
 ⑦ 11月3日第17回AJUワイン
 フェスタ
 ⑧ 教区正義と平和委員会では10月
 17日に予定していた第3回学
 習会(上智大学教授・中野晃
 一氏)は中止。代わりにDV
 D鑑賞会を開催。
 日時 10月17日(土) 13:30
 場所 福音館(布池教会東隣り)
 題名 「証言 沖縄スパイ戦史
 ～少年兵を使い捨てた
 住民虐殺の秘密～」

〔訃報〕ブレンダン・アンソニー・
 ケレハ神父(神言修道士)
 8月16日午前5時頃、カトリック南
 山教会司教館目室で心筋梗塞のため
 帰天。享年69歳。葬儀ミサは8月19
 日に南山教会でしめやかに営まれま
 した。
 《略歴》
 1950年12月17日イギリスに生ま
 れる。71年9月14日初誓願立。75
 年3月30日終生誓願立。75年9月
 14日司教叙階。76年2月来日。78
 年81年南山教会助任司教。82年
 年秋田教会助任司教。85年87年横
 手教会主任司教。87年91年イギ
 リス管区にて立願神学生指導司教。91
 年93年吉祥寺教会助任司教。93年
 96年神言神学院(神学生養成担
 当)。96年2003年ヨハネ館(南
 山大学男子学生寮)館長。02年12
 年南山国際高等・中学校教員。12年
 南山教会。
 本を読むことが好きで、特に信仰、
 聖書、人間の心に関する本を読み、
 聞けばなんでも丁寧に教えてくれる
 神父であった。豊かな知識によっ
 て、すべての人に神に向って歩める
 ようにみ言葉を伝え、真実を熱心に
 伝えた宣教師であった。司牧の傍ら
 名古屋教区典礼委員会の委員長も務
 めた。
 20年8月16日帰天。

11月の教会暦
 1日(日) 諸聖人(祭)
 2日(月) 死者の日
 8日(日) 年間第32主日
 9日(月) ラテラン教会の献堂
 15日(日) 年間第33主日
 貧しい人たちの世界祈願
 日
 22日(日) 王であるキリスト(祭)
 29日(日) 待降節第1主日

10日(火) 三河B会議/中学生会
 10日(火) 難民移住移動者委員会/樹
 の会
 12日(木) 教区顧問会
 13日(金) 正義と平和定例会
 14日(土) 殉教者定例会/信徒協幹
 事会
 15日(日) 城北B会議/城南B会議/
 青年委員会
 15日(日) 22日(日) 聖書週間
 17日(火) カトリック看護協会例会
 19日(木) 月集
 21日(土) レジオ名古屋クリア
 22日(日) 城東B会議/北陸B会議/
 青少年司牧部「子どもの集
 い」
 23日(月) 祝 共助連絡会「共助の集い」
 28日(土) 典礼委員会
10月
 1日(木) 常任司教委員会
 3日(土) 聖霊会初誓願式
 10日(土) 神言会司教叙階式(南山教
 区)

◆10月の吹き出し
 木1日東山、8日布池、15日聖霊・
 南山・樹の会、22日城北橋、29日
 一宮、金2日喜望の会、9日長浦、
 16日AJU・恵方町、23日布池、30
 日江南



建設費の返済に協力を
 620件 30,680,990円
 目標額 40,000,000円(8/26現在)
 達成率 約76.7%
 郵便振替 00810-5-50605
 加入者名 カトリック名古屋教区
 通信欄に「福音館建設」と必ず
 ご記入ください。

**カトリック名古屋教区
 セクシュアル・ハラスメント
 対応委員会
 ホットライン
 ☎080-2625-4681**
 受付時間 月～金(祝日を除く)
 10:00～12:00
 13:00～16:00
 名古屋市東区葵2-6-35
 カトリック名古屋教区センター
 相談の秘密、プライバシーは厳守します。
 安心してご相談下さい。

**パウロ成井大司教叙階式の
 ビデオ配信のお知らせ**
 成井大司教叙階式が9月22日、新潟カテドラルで予定されています。当日は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、関係者のみで行われます。実際に参列できない方のために、ビデオ配信で叙階式に与って下さい。ビデオ配信のアドレスは次の通り。
 放送日 9月22日午前10時より
<https://bit.ly/3hv2zqn> <<https://bit.ly/3hv2zqn>>

**2020年
 名古屋教区合同追悼ミサのご案内**
 ○東八事霊園内 第一カトリック墓地
 日時 10月11日(日) 14:00(雨天中止)
 灌水・献香に続きミサ
 ☆ミサの時間が変更となっています。
 ○東八事霊園内 第二カトリック墓地
 日時 11月1日(日) 14:00(雨天中止)
 今年度は新型コロナウイルス感染予防のためマスクを着用のこと。体調のすぐれない方は無理のない様にお願ひします。聖歌は歌いません。

東日本大震災・福島原発事故、災害支援金の報告
 発災時よりカリタス福祉委員会へ振込された支援金のご報告
 2011.3.17(発災後募金開始) から 2020.8.31までの合計 32,359,825円
 ☆2020年8月 振込された支援金
 3件 174,431円 (振込手数料引き去り後の金額)
 振込ご協力いただいた小教区、個人(敬称略)
 金沢教会、一宮教会、佐々田敏子
 ★名古屋教区の支援金は
 大阪教会管区震災復興支援プロジェクト、福島での原発被災支援活動されている団体を中心に支援しています。
 引き続き皆様のご支援、ご協力をお願い致します。
 ・毎月支援状況は名古屋教区報で報告。
 ・各ベースの震災支援状況は仙台教区サポートセンター活動日記のHPに掲載。
<http://caritasjapan.jugem.jp>

《雨天中止について》
 当日のNHK朝の天気予報で午後はっきり雨と予想された場合、合同追悼ミサは中止。当日は11:00迄事務所で電話の問い合わせに対応いたします。公共交通機関をご利用下さい。
 問合せ 名古屋市東区葵2丁目6-35
 カトリック名古屋教区本部事務局内
 カトリック霊園管理事務所
 ☎052-935-2223、FAX052-935-2254
 《お願い》
 名古屋市霊園管理事務所のご指導により墓地への納骨の際は、申請・許可が必要です。
 八事霊園の方は、事前に教区本部事務局墓地係までお知らせ下さい。東八事霊園の方は管理会社(株)名古屋浄苑(☎052-831-1370)までお問い合わせください。

支援金振込先
 口座番号: 00820-5-137456
 名義: カトリック名古屋教区カリタス福祉委員会
 ※「東日本大震災・災害支援金」と募金の意向を記入願ひます
ご連絡・問合せ先
 名古屋教区カリタス福祉委員会
 電話 052-852-1426
 FAX 052-852-1422